

歌集『あかね雲』より (三)

登美子

美容院出ずれば西空茜さす

明日は晴れよと旅思いおり

桑の葉の焙茶飲みて毎日を減塩減食一生の性

わが庭に最後となりし柿の葉の

大見切りて落ちてゆきたり

軒下の吊り柿少し残しておく

友なき鳥よ遊びにおいて

重要書類一つ袋に纏めおく

予期せぬ災害無き事を願いつつ

葺き替えす屋根の上の瓦職人

雪の来ぬ間にと急ぎておりぬ

柿の木を蔓紫の登りきて

覆いおる中柿色つきて来る

年一度着たる着ものの畳み方

教えしわれに孫の素直

公孫樹の実三島の池に一つ落ち

我が先にと鴨の寄りたる

草が好き土が好きよと繰り返す

友逝き畑に泡立草茂る

秋風に乾したる敷布の糊効きて

今宵の眠り約束されたり

夜な夜なに鉦を打ちおる鉦叩き

多き危険を知らさぬとてか

草刈り機使えぬ我に付き合いて

鎌瘦せ傷つき春も終わりぬ

皆よ聞け鉦叩き虫の警告を

うたゝ寝のみで過ごせまいぞよ

記念樹の老松巡りて切る切らぬ

論議百出アンケート出す

長病みて逝きたる友の畑角に

倒れしままの菊赤々と咲く

気にかけてし白きの混じりし我が髪に

雪の掛かりて白きを隠す

雪明けるわれの息も白くして

礼言う人の息も白かり

またの春誓いて別れしクラス会

席ガラガラとなる

惜しまれつつ逝かれし友の葬列に

偲ぶ雨降る花冷えの夕

玉葱の料理好みし嫁思い

たく育てと寒肥やりおす

この痛み生きし証とさすりつつ

モンペに着替えて畑へ行きぬ

洋裁費弍十円也と書き残る

インクの滲む父の日記帳

癒り初む右足痛む夢を見ぬ

目覚めば涙の跡の残りぬ

齢重ね細き指も節高く

クルクル廻れど指輪は落ちぬ

久乗りし路線バスは込み合いて

海の匂いの満ち満ちており

今年また喜怒哀楽健やかにと

手をあわせつつ晩鐘を聞く

何度でも拝む伊吹峯の初光の

内なる鼓動に心洗わる